

P-061

退院後の生活に不安のある喉頭全摘術後の患者への自己管理に向けての関わり

福井赤十字病院 看護科

かばた やすえ
加畑 安恵

【はじめに】A氏は喉頭全摘術を受け、一人暮らしであるため不安を抱えていたが自宅退院を希望した。A氏が安心して退院できるように環境を整えた。また退院2ヵ月後にA氏との面接を実施し、A氏より退院時指導の評価を得たのでその結果を報告する。本研究は倫理委員会の承認を経て実施した。

【事例紹介】60代女性、独居。平成22年喉頭癌と診断され、気管切開、喉頭全摘術を受ける。

【看護の経過】術後、創の状態が落ち着いた頃からA氏に気管切開からの自己吸引指導を開始したが、なかなか上手く吸引することができなかった。この頃から呼吸困難を訴えるが吸引してもほとんど痰は吸引できず、そばに付き添うと落ち着くということがしばしばあった。A氏に思いを尋ねてみると「家で緊急時に自分で吸引できるか不安」と退院後の生活に対する不安を訴えた。そこで日々の吸引をA氏に行ってもらって練習を繰り返すようにスタッフ全員で統一して関わった。ケアマネ、MSWなども参加してのカンファレンスを持ち、コミュニケーションに不安を持っていたA氏に対して社会的環境を整えた。またA氏の希望もあり患者会の代表の方と面談し「話を聞いてよかった」という反応を得た。自宅退院2ヵ月後、A氏に面接を実施し、「家でも焦ることなく吸引することが出来ている。緊急通報システムがあるから安心」との返答を得た。

【考察】喉頭全摘術を受けたA氏の大きな不安の一つは、退院後の緊急時の呼吸管理や他者への連絡方法であった。繰り返し練習し手技習得を促すことで不安を軽減することが出来た。患者会の人と話すことで、術後社会で暮らす姿をイメージ化することが出来、さらに地域でのサポート体制を整備することによって独居でもすぐに頼れる人がいる状態を作ることができ、これもA氏の安心につながったと考える。

P-063

検診での緑内障疑い患者の全身状態との関連

福井赤十字病院 眼科¹⁾、福井赤十字病院 健診センター²⁾

よこた さとし
横田 聡¹⁾、額田 和之¹⁾、辻 隆宏¹⁾、西川 邦寿²⁾、
小堀 朗¹⁾

【目的】人間ドックでの緑内障疑い例と高血圧との関連が報告されている。また近年、網膜神経線維層欠損と脳微小血管異常との関連が報告された。視野障害や神経線維層欠損の出現前からの緑内障と循環障害の関連を検討するために、検診における緑内障疑い例の脳ドックを含む全身の検診の項目との関連について調べた。

【対象と方法】2010年1月から12月の間に当院検診センターを利用し、脳MRI・頸部超音波検査および眼底写真検査のいずれもを受けた362人(男性258人、女性104人。平均年齢56.4歳)、BMI、腹囲、喫煙歴、血圧、空腹時血糖、TG・HDL・LDL、眼圧、頸部MRI、頸部エコー検査の結果と眼底写真による緑内障疑いとの関連について検討した。緑内障疑いの診断は緑内障ガイドラインに従った。

【結果】362人のうち緑内障疑いは66人であった。緑内障疑い群では、収縮期血圧異常(37.9%)、空腹時血糖異常(18.2%)、頭部MRIでの虚血性変化あり(30%)の割合が対照群(それぞれ25.3%、8.8%、11%)と比較して有意に高かった($P < 0.05$, 二乗検定)。また、緑内障疑い群の平均眼圧は14.0mmHgで対照群の13.1mmHgと比較して有意に高かった($P < 0.01$, スチューデントのT検定)。

【結論】既報と同様に、検診での緑内障疑い例と収縮期血圧異常との関連が示された。緑内障疑いは、高血糖や高眼圧とも関連が再確認された。既報に加え、頭部MRI虚血性変化についても対照群と比較して有意な差が見られ、glaucoma continuumの既報より早い時点からの脳循環障害との関連が示された。

P-062

耳鼻科手術患児へのプレパレーションの実施と評価

盛岡赤十字病院 看護科

きくち しほ
菊池 志歩、高橋 智子、立花貴久美

【目的】入院決定時からプレパレーションを実施することによる効果を明らかにし、今後の看護援助へつなげる。

【方法】1) 外来で絵本を配付。

2) 入院後、紙芝居等を使用してプレパレーション実施。退院に向けての目標を共有。

3) 入院後3回、半構成的面接法実施。児や親の様子を観察。

【結果】1) 児の反応

面接時「絵が入っていたのでおもしろかった」との発言があり、事前に絵本を読んでから入院していた。プレパレーション時には紙芝居に集中しており、全員が座ったまま聞くことが出来た。手術当日、処置時に暴れる児はおらず、手術室でも泣く児はいなかった。検温や観察の拒否もなかった。

2) 親の反応

術後の面接時に、「説明と同じだった」との感想が多く、児の頑張りや認める言葉を出していた。目標は、ほぼ達成できたと評価していた。

【考察】入院前に絵本を配付することにより、家族で入院や手術についてのイメージを持つ事ができ、説明する時間を設けることにつながったと思われる。絵本を配付する事は、児のためだけではなく、親からの説明の手段の一つになったと考えられた。プレパレーションを実施したことで親が安心した態度で児に関わる事ができ、そのことが児の心の準備へとつながった。ほとんどの親が児の頑張りや認める言葉を出しており、このことは児の自己効力感を高めることにつながったと考えられた。

今回は耳鼻科手術の小児に対してのプレパレーションを行ったが、小児から老年まで様々な年齢や発達段階に合わせて、手術前後の精神的ケアを入院決定時から他職種と連携して行う必要がある。

【結論】1) 入院決定時から絵本を使ったプレパレーションは、先行研究同様有効。

2) 継続してプレパレーションを行うことで、児だけではなく親の安心にもつながり、自己効力感を高める事へつながる。

P-064

当院歯科口腔外科における顎顔面骨折症例20年間の検討

姫路赤十字病院 歯科口腔外科

かまもと むねみ
釜本 宗史、石井 興、渡邊 裕之、長縄 憲亮、
花田 泰明、松本 憲一、神谷 祐司

姫路赤十字病院は兵庫県西部に位置し、姫路市を中心として背景人口約90万人を有する中・西播磨医療圏の中核的病院である。病床数は509床、診療科は17あり、地域の急性期疾患に対応する二次医療機関としての役割を担っている。当院歯科口腔外科が開設されて20年が経ち、開設から口腔外科的疾患を中心に、外来及び入院診療に当たってきた。

【目的】当地域での顎顔面骨折の最新の臨床統計を行い、現状を把握し検討することを目的とした。

【対象】対象は1990年6月から2009年6月まで過去20年間に姫路赤十字病院歯科口腔外科を受診した歯槽骨単独骨折及び病的骨折を除く顎顔面骨折症例とする。当科で作成された診療録を参考にデータを採取し、対象期間中の顎顔面骨折の総数848例を対象に検討を行った。調査項目：受傷原因、年齢、受傷部位、治療法、受診経路。これらの結果について1990年～10年間と2000年～10年間で比較検討する。

【結果】性差：男性593例、女性255例。受診経路：院外医師より紹介476例(56.1%)、受傷原因：交通外傷270例(31.8%)、転倒248例(29.2%)、受傷部位：下顎骨骨折単独637例(75.1%)、治療法：観血的整復術415例(48.9%)。以上について統計解析し臨床的考察を行い報告する。